

宮沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36

宮沢賢治記念館

☎ (0198) 31-2319
FAX (0198) 31-2320

宮沢賢治と水沢の天文台の不思議な縁

国立天文台水沢 VLBI 観測所長 本間 希樹



私が現在勤めている国立天文台・水沢 VLBI 観測所は、もともとは緯度観測所とよばれた天文台で、1899（明治32）年より現在まで岩手・水沢の地で宇宙の観測を続けています。そして、緯度観測所から現在の国立天文台に至るまで、私たちの観測所は宮沢賢治と不思議な縁を持っています。

よく知られているように、賢治は宇宙に対して強い好奇心を持っており、宇宙を題材にした名作を複数書き残しています。そんな賢治にとって緯

度観測所は、地元岩手にいながら最先端の宇宙像を直接感じられる特別な場所であり、賢治が複数回観測所を訪れたことがわかっています。そして、そこで見聞きしたことが作品づくりに様々な影響を与えています。そのことが最もよくわかる作品に「風野又三郎」があります。賢治の代表作の一つ「風の又三郎」の前駆的作品とされている作品です。この中で、又三郎が観測所に立ち寄り、当時所長だった木村榮がテニスをしている時に、又三郎がつむじ風を起こしてテニスの邪魔をする、というシーンが描かれています。木村榮は実際にテニス好きで、よく昼休みに観測所内でテニスをやっていたので、このシーンは賢治が観測所で実際に見た様子をもとにしたものと考えて間違いありません。

他にも緯度観測所に関わりのある賢治の作品と

して、詩集「春と修羅」の中にある「晴天恣意」があります。この詩は水沢緯度観測所にて読んだものとの注が賢治自身によって書かれており、その日付が1924（大正13）年3月25日と記されるなど、賢治が観測所に来た日付までわかっています。また、これ以外の作品でも、童話「土神と狐」の中で、狐が水沢の天文台で星を見た、という自慢話をするシーンが描かれています。これらの緯度観測所と関わりのある作品群から、賢治にとって水沢の緯度観測所は最先端の宇宙につながる貴重な場所だったことが読み取れます。

現在の水沢の天文台は、緯度観測所から国立天文台水沢 VLBI 観測所へと組織が変わり、観測手法も光から電波へと変わりましたが、岩手・水沢の地で今も宇宙の観測と研究と続けています。この20年間は超長基線電波干渉法（Very Long Baseline Interferometry: VLBI）の技術を用いて、天の川銀河の3次元地図作りを進めてきました。また、宇宙で最も不思議な天体であるブラックホールの観測にも力を入れており、2019年には国際協力でブラックホールの影を史上初めて写真にとることに成功しています。これらの最先端の成果を賢治が見たら大変驚くでしょうし、もし賢治が現代に生きていたら、これらの研究からどのようなインスピレーションを得て、どのような作品を紡ぎ出すのか大変興味深いところです。

ところで、賢治の代表作である「銀河鉄道の夜」と、私たちの観測所との間にも、実はブラックホールを通じた不思議な縁があります。「銀河鉄道の夜」にはモデルとなった鉄道があり、その一つが岩手軽便鉄道であることは広く知られています。この鉄道は現在の釜石線の一部で、なぜこの鉄道ができたのかと言えば、釜石が鉄の街として重要であったからです。釜石は日本の近代製鉄発祥の地であり、製鉄が盛んになった主な理由は釜石の山中で良質な鉄鉱石が採れたからです。

では、元素としての鉄がどこから来たのかというと、これは宇宙で作られたものです。鉄は、重い星がその中心部で核融合反応を起こしながら燃えるときに、星の中心部で作られます。鉄を作るのは太陽の10倍以上の質量を持った重たい星のみで、鉄まで核融合反応が進むとそれ以上は核融合が進まないで寿命を迎えます。そして星は最後の大爆発である超新星爆発を起こします。このとき星の中心部では中性子星やブラックホールと

いう星の燃えカスに相当する天体が作られます。つまり、宇宙で鉄の元素ができる現場はブラックホールが誕生する現場でもあり、その2つには切っても切れない縁があるのです。岩手で採れる鉄鉱石の中の鉄の元素を一粒取り出してその歴史を何十億年もさかのぼることができれば、かならず星の最後の瞬間に行きつくはずで、そう考えると、岩手の鉄と私たちが研究対象でもあるブラックホールとは密接につながっていて、私たちの研究も賢治の「銀河鉄道の夜」にも、その背後にはブラックホールの存在があるのです。

このように水沢の観測所は、賢治が生きていた時代のつながりはもちろんのこと、現在も天の川銀河やブラックホールの研究を通して、賢治の作品との縁があります。長年岩手の地で研究を続けている私たちとしても、この不思議な縁を大事にしながら今後とも研究を続けていければと思います。賢治が盛岡中学の後輩に充てたメッセージである「生徒諸君に寄せる」の中には、「宙宇は絶えずわれらによって変化する」というフレーズがあります。受け取り方によっては、このフレーズは天文学者に向けた応援とも読め、この言葉のように今後も最先端の観測によって宇宙像を常に変化させていきたいと思います。



写真：奥州宇宙遊学館

国立天文台水沢 VLBI 観測所のキャンパス内に立つ奥州宇宙遊学館。宇宙について学べる科学館として運営されているこの建物は、もともとは大正時代に建てられた緯度観測所の二代目の本館でした。宮沢賢治が観測所を訪れたのも、この建物が緯度観測所本館として使われていたところのことです。

「透きとおったたべもの」というエネルギー

フリー編集者・作家 松田素子



どう生きていったらいいのかわからない日々が続いていた。瀬戸内の小さな田舎町から東京の大学へ入り、コンプレックスの塊ようになっていた私は、ある日、小さな部室で独りぼんやりと座っていた。その日、自分が決定的な出会いをすることも知らずに――。

一人の先輩がふらりと部室に入ってきた。「なにしてんの？」と聞かれ、「…べつに」としか答えられない私に、「ふうん」という顔をした彼は、腕に抱えたパチンコの景品の袋からチョコレートを一個とりだして「これ、やるわ」と言って出ていった。と思ったらすぐに戻ってきた。よほど私になさげなく見えて気にしてくれたのかもしれない。「これも、やるわ。もう読んだから」。そう言って、Gパンの後ろポケットからヨレヨレになった文庫本を引っぱりだしてぼんと置くと、もう一度、ほんとうに出ていった。

目の前に置かれた本のタイトルは、『銀河鉄道の夜』。――もちろん知っている。宮沢賢治という人が書いたことは知っている。でも私は、そのときまで「銀河鉄道の夜」を読んだことがなかった。チョコレートもあるし、他にやることもないし、読んでみようかな……。そうして、読み終えたそのときは「不思議な話だなあ」と思っただけだったように思う。私にとってのほんとうの出来事は、実はこの直後に起こった。

部室を出て外の景色を目にした瞬間、私は「え？」となった。部室に入る前に見た景色とはまったく違うものが見えたのだ。

「葉っぱ、って……」私は、目をみはった。「一枚一枚、ついてるんだ！」。

空を見あげれば、「ああ、雲がいま〈あんな風に〉動いている」と、もはや思い出せないけれどオノマトペのような愉快な言葉が自分の中から出てきた。誰かからの借り物やコピーではない自分自身の言葉で！ 緑の集まりにしか見えていなかった木々や葉っぱはくっきりと光って立ち、世界が生まれたてのように塗りかわって見えた。あたりまえのことが見えなくなっていた私の目は、あたり

まえのことを発見して、驚いていた。

どうしてこんなことが起こったんだ？ 動悸を抑えて考える。原因は？――あれしかない。さっき読んだ「銀河鉄道の夜」だ。宮・沢・賢・治。そのときのことを「読書体験」などと呼ぶことはできない。あれは私にとって、いわば、「事件！」だった。

たった一人の作家の作品を、全て読みたいと思ったのも初めてだった。それに応えてくれるかのように、おりしも筑摩書房から『校本宮沢賢治全集』が刊行された。貧乏学生にとっては容易には手の届かない金額だったけれど、本屋に嫌がられながら10回以上のローンを頼み込み、バイト料をつぎ込んでそれを買った。

――その後さまざまな縁がつながり、私はいま「絵本編集者」という人生を歩んでいる。

それだけでない。〈宮沢賢治の絵本シリーズ〉と称して、二十年以上にわたり賢治作品を何冊もの絵本にしてきた。絵本という切符を持って賢治をもう一度旅していると言ってもいい。「絵本化」というこの旅に出るとき私がにぎりしめた大切な切符は、実はもうひとつある。その切符とは、賢治の言葉だ。それは童話集『注文の多い料理店』の序の中にある。

「わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほったほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません」

――「たべもの」と賢治は書いている。この言葉は私にとっての「ジョバンニの切符」だ。

その言葉を受けて私は賢治作品の一字一句を大切に咀嚼する。絵本化するという旅がなければ気づかないこと、立ち止まらないこと、考えないことがたくさんあった。

そのいろいろを記録しておきたくて、私は、二年前から「宮沢賢治と絵本の時間」というトークイベントを始めた。これまで開催したものはすべてYouTubeで公開している。始めたばかりの一回目などはあんまり不慣れでいずれやり直すつもりなのだが、興味のあるものだけでも見ていただけたら嬉しい。絵本化するということが決して一筋縄ではいかないこともわかっていただけるかと思う。

このシリーズは、2025年秋刊行予定の『グスコブドリの伝記』で完結する。トークイベント

もそれまで続けるつもりだ。

——出会ったときからいまに至るまで、私は賢治から、ずっと問われ続けてきたような気がする。「おまえはどう生きているのか?」「どう生きたいのか?」と。

私にとって、宮沢賢治とその作品は、問われ続けるもの、励まされ続けるものである。賢治風に言えば、「透きとおったたべもの」であり、エネルギーであり続けた。

あの日、あの部室で、チョコレートと共に目の前にやってきた一冊の文庫本。あの出会いがなかったら、私はいまなにをしているだろう……。私は確かに賢治に恩義がある。絵本というメディアにも恩義がある。恩義があるものには「恩返し」をしなくてはと思う。それがいまの私の仕事だ。

いや、「恩送り」という方がいいかもしれない。絵本という果実として実った賢治作品を食べたどこかの誰かが、あの日の私のように、世界をもう

一度発見し、その作品をしっかりと食べ、生きる力に変換してくれることを、私はいま心から願っている。



結 い — 賢治が繋ぐ心と心 —

おもてなしの心

花巻おもてなし観光ガイドの会

会長 高橋孝子



私は花巻に生まれ育ち、現在も花巻に在住しています。

高校は賢治さんが教鞭を執った花巻農業高校に入学し、賢治さんの作品に出合ったのも高校時代でした。

入学後の応援歌練習で「精神歌」「第三応援歌バルコクバララゲ」「黎明行進歌…♪蛇紋山地の赤き空」や、劇「植物医師」の作品を知ることができました。

卒業後の進路は観光バス会社への就職。県内外の観光地を案内、人と話す事の楽しさや喜びを体験し、充実した時でもありました。

時は流れ、二人の子育ても一段落し自由になれる時間が持てるようになったある日、観光協会が出版した「ガイドブックの手引き」という本でボランティアガイドの存在を知り、そこに魅力を感じ

じた私は、早速会への登録をしました。今から22年前の平成13年春の事でした。

その頃は岩手県内にはボランティアガイドの会が次々と発足した時期でもありました。現在では県内22団体が加盟、それぞれの地域活動の情報交換や研修を通して絆を深め、交流会も実施しています。

私たちの会は10回の養成講座を修了した11人のガイドが在籍しており、おもてなしの心を第一に活動中です。

主な観光案内施設は賢治記念館が大部分を占めています。お客様の希望に沿った案内を基本としつつ、移動中の車中での案内はバスガイド時代の経歴を生かし、花巻全般のご案内もしています。

今年は賢治没後90年に加え、「銀河鉄道の父」の映画公開という事もあり、ロケ地を巡る町歩きコースが人気です。

また、女性ならではのおもてなしとして、女性グループの「花巻コンシェル」を結成。賢治祭、高村祭、花巻祭りと、活動の場は多岐に渡ります。

その活動の一環として、SL銀河運行開始の

2014年から昨年まで8年間、JR様からのご厚意で、宮沢賢治の作品を車内で朗読・紹介という形を通してSL銀河に携わってまいりました。

始発の花巻駅では郷土芸能の鹿踊のお見送りを受けて出発、沿道付近の住民の皆様や鉄道ファンの方々から手を振って歓迎していただいた事も良い思い出です。

春は桜と菜の花のコラボ、夏のひまわり、秋のコスモスと、変わりゆく季節の花々も見どころの1つでした。馬の里ではSLと馬の並走という嬉しいサプライズがあったり、宮守の道の駅では黒煙を上げ汽笛を鳴らしながら眼鏡橋を渡るSL銀河の雄姿を、大勢のファンが迎えてくれました。

そんな人々から愛されたSL銀河ですが、順調な運行ばかりではなく、天候悪化で走行不能となり、やむなく途中の駅で下車という経験もしました。

しかし悪天候が逆にプラスに働いた事も。冬の企画のクリスマスナイトツアーでは深々と降りしきる雪の中、ライトアップされて幻想的な眼鏡橋をゆっくり走行する様は、「銀河鉄道の夜」そのものでした。

沢山の思い出をのせて9年間走ってきたSL銀河も、残念ながら客車の老朽化により、惜しまれながら6月11日ラストランを迎えました。

これからも一期一会を大切に“おもてなしの心”で、お客様をお迎えしたいと思います。



銀河ステーションを目指して

公務員 西尾陽子



私は、岩手県外の出身ですが、宮沢賢治さん自身や作品に魅了され、約4年前に岩手県花巻市に移住しました。現在はSNS上で友人と「賢治文庫」というアカウントを作り、賢治さんに興味を持って花巻を訪れる人が増えると良いなと思い、賢治さんの作品や花巻での暮らしについて発信しています。とはいえ、賢治さんについて何か研究しているわけではなく、表現者として大々的に活動しているわけでもありません。そんな自分が、今回、記念館通信に寄稿するという素晴らしい機会をいただけたこと、大変光栄に思います。

移住した当初は1人で不安でしたが、宮沢賢治ファンという繋がりを知り合いが増えていき、今では、地元よりも知り合いが多いのではないかと思います。今回のご縁を含め、花巻での暮らしは賢治さんに支えられていると言っても過言ではありません。「支えられている」というと、私の人生は、賢治さんだけでなく、「銀河鉄道の夜」という作品にも支えられています。私にとっては、本当に特別で大切な作品です。というのも、私は、銀河鉄道が本当に存在しているとずっと信じていて、自分の死後、銀河鉄道に乗って天上へ行くことを人生の最終目標にしているからです。

もちろん、「銀河鉄道の夜」がフィクションであることはわかっているのですが、小さい頃から、アニメや絵本、プラネタリウムなど、さまざまな表現の「銀河鉄道の夜」に触れるうち、自分もあの世界の中を銀河鉄道に乗って旅がしたいと強く思うようになっていました。色とりどりに輝く三角標や水素よりも透き通った天の川、青宝玉と黄玉の観測所、真っ赤に燃える蠍の火。幻想的で美しい景色を見ながら旅ができたらどんなに幸せでしょう。では、どうしたら銀河鉄道に乗れるのか。銀河鉄道は死者を乗せて走っているのだから、自分も人生を生ききった後に乗れるのではないかな。そう思い至った私は、銀河鉄道が存在すると信じ

るようになったのです。

死後、人の魂がどうなるか誰にもわからないなら、銀河鉄道に乗って旅をすることだってあるかもしれない。自分の人生を全うしたのちに、あんなに美しい世界を旅することができるなら、どんなに苦しくとも頑張って今を生きることが出来ます。だから私の人生は、「銀河鉄道の夜」という作品に支えられているのです。

銀河鉄道に乗るその時を楽しみに、私は花巻というまちで今日も楽しく生きています。



★八戸から来ました。宇宙が大好きです。宇宙のことを宮沢賢治がとても詳しいと知って驚きました。伝記が昔から好きで、お父さんから宮沢賢治の伝記の本をもらって早速読みました。宮沢賢治のすごさがとてもよく分かりました。そこで、宮沢賢治記念館に行ってさらに詳しく知りたいと思いました。うまくいかない時は反省し、自分の好きなところだけ頑張るのではなく、苦手なことにも挑戦して諦めないところがすごいと思いました。宮沢賢治記念館に来てとてもよかったです。また来て勉強したいと思います。

★今までずっと訪れたかった宮沢賢治記念館に来て、賢治の世界観にふれることができました。これから賢治のことを学んでいきたい。私の人生に光をあたえてくれた大好きな存在です。

★宮沢賢治没後 90 年ということで、最近はテレビや映画で良く目にしますね。賢治作品は、10 代、20 代のころから、その時その時読みたくなる時期がめぐってきますが、50 代になった今、自分の感じた賢治はまた新たな発見と、変わらぬ想いに胸がいっぱいになりました。

★東京から来ました。花巻に来るのは四回目くら

いでしたでしょうか。賢治さんのファンなのですが、今回は三年ぶりほどとなり、ずいぶんと久しぶりになってしまいました。このたびの旅のメインは、SL 銀河とのお別れです。SL 銀河に乗りながら、じっくりと「銀河鉄道の夜」を読みました。ついでに、北上に行って「銀河鉄道の父」の映画も観てきました。思いのほかお天気が悪くなってしまう、今日は 88 年ぶりの 5 月の寒さだそうで、風も風の又三郎です。それでも、変わらない花巻の景色を大変嬉しく思いました……と思ったら、どうしてか、今ふと晴れてきました。賢治さん、ありがとう。また来ます。

★朝、盛岡で「銀河鉄道の父」を観て、友人と二人でその後花巻入りしました。「身照寺」で賢治さんのお墓参りをしてからこちらに来ました。岩手に住んでいるのに、今まで何も知らなかったのだなと痛感。

★小学校 6 年生の国語の授業で「雨ニモマケズ」の詩を学び、暗唱した思い出があります。クラス全員が暗唱するまで続けました。昨日のことのように懐かしく思い出されます。今日初めてこの地を訪れ、天気もよく幸せに思っています。

★SL 銀河ラストランを見てから来ました。夜の宮守のめがね橋を走る光景は、まさに“銀河鉄道の夜”そのものの光景だと、感極まり涙が流れました。宮沢賢治の想像通りの景色だったのではないのでしょうか。幻想的な文学を生み出した宮沢賢治を尊敬します。

■「賢治の世界」セミナー 2023



令和5年度で13年目となる「賢治の世界」セミナーを、花巻市内の小中学校・高校を会場に開催しています。

最初のセミナーは、音楽朗読ユニット KatoShoji の加藤亜祐美さんと小路未央子さん、俳優の定本理佐さんを講師としてお招きし、矢沢小学校4年生の子どもたちに「賢治の世界」を届けていただきました。テーマは「体感する絵本『虔十公園林』～土と木のお話を添えて～」。当日は6月のさわやかな風の中、雨が美しい音を鳴らして降っていました。土についての講話では、実際に学校の花壇の土を袋に入れたものを子どもたちが匂いをかぎ、野菜の葉っぱ、雨、カブトムシなど色々な声があがりました。物語の導入では不思議な音がするウッドドラムという土製打楽器も登場し、エスペラント語の歌詞による加藤さんのオリジナル曲による歌と演奏も披露されました。また鑑賞していた子どもの中には、定本さん演じる虔十が鍬を振るうジェスチャーを見て、一緒になって楽しそうに動きを真似ている子もいました。講師ひとりひとりの高い表現技術が合わさることによって、いつの間にか物語の世界そのものに入り込んだような感覚になるほど素晴らしい公演でした。最後に宮沢賢治作詞の「精神歌」をみんなで歌いました。学校の授業で扱ったことはないとのことでしたが、講師がお手本を歌って聞かせるとすぐに大きな声でついて歌い、最後にはみんなで大合唱をすることができました。

宮沢賢治作品は、年齢を重ねるほどに理解や感じ方に深みがでてくると思います。子どもたちがまたいつかこの作品を読み、賢治さんが伝えたかったことを思い出してくれることを願ってやみません。

■「賢治の世界」ワークショップ 2023

「賢治ゆかりの鳥羽源蔵を訪ねて

～陸前高田市～」



花巻市民を対象に宮沢賢治ゆかりの地を訪ねて歩く、「賢治の世界」ワークショップ。令和5年度2回目は陸前高田市で、7月18日に開催しました。普段沿岸地域を訪れる機会が少ないということもあり、多くの市民の方からご応募いただき、参加者20名のうち9名は初参加の方々でした。今回は、賢治作品に多大な影響を与えた、岩手県気仙郡小友村（現在の陸前高田市小友町）出身の、鳥羽源蔵氏のものについて学ぶということが主な内容でした。

優れた博物学者であった鳥羽氏は、NHK 朝の連続テレビ小説でも有名な牧野富太郎氏とも交流がありました。当時やり取りをした手紙が、陸前高田市立博物館に展示されています。賢治さんとのゆかりとしては、花巻の北上川で発見されたバタグルミの化石の調査を鳥羽氏に依頼した際のことです。賢治作品のなかでも、「猫の事務所」や「毒蛾」などには、鳥羽氏が執筆した記事による影響が考えられる内容が出てきます。今日の学びをきっかけに、作品を改めて読んでみたいという方もいらっしゃいました。

宮沢賢治と鳥羽源蔵の関係、牧野富太郎との関わりについて初めて知ったというお声も多く、バス移動中に行った、当館学芸員の牛崎による解説も参加者のみなさまから好評をいただきました。

その他にも、岩手県立高田高校で宮沢賢治詩碑を見学したり、高田松原津波復興祈念公園で自由行動をしながら東日本大震災からの復興について見てまわったりと、大変充実した内容のワークショップでした。

《特別展》のお知らせ

◆特別展「銀河鉄道の夜」



期間

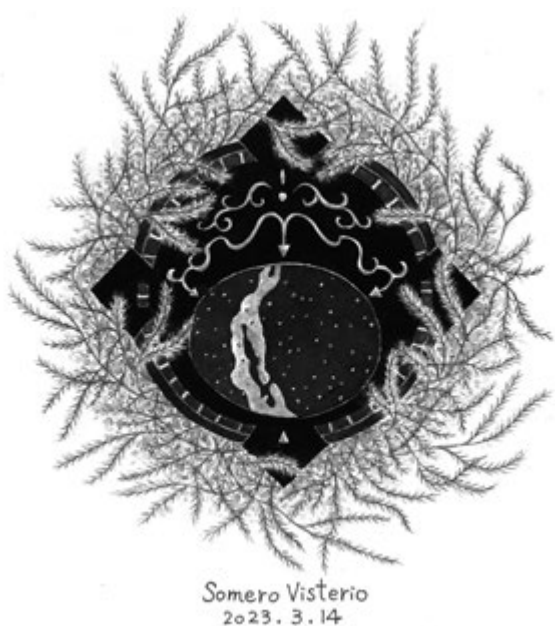
前期：令和5年5月13日（土）～9月10日（日）

後期：令和5年9月16日（土）

～令和6年2月12日（月・祝）

宮沢賢治没後90年となる令和5年は、映画「銀河鉄道の父」が公開となり、そのタイトルとも関連があることから、賢治の長編作品「銀河鉄道の夜」についての特別展を前後期の二期に分けて開催します。

会期中には全83枚プラス構想メモ1枚の草稿を公開し、賢治と作品の魅力を再確認していきます。



自筆草稿の公開

①令和5年5月13日（土）～21日（日）

（9日間）

②7月15日（土）～23日（日）

（9日間）

③8月11日（金・祝）～20日（日）

（10日間）

④8月22日（火）～27日（日）

（6日間）

⑤9月16日（土）～24日（日）

（9日間）

⑥11月23日（木・祝）～12月1日（金）

（9日間）

⑦令和6年2月3日（土）～12日（月・祝）

（10日間）

※特別展「銀河鉄道の夜」の自筆草稿の公開は、スケジュールの都合により変更になる場合がございます。詳しくは、当館ホームページをご覧ください。

◆特別展「山男の四月」

期間

令和6年2月23日（金・祝）～5月6日（月・祝）

「山男の四月」は生前に発表された唯一の童話集『注文の多い料理店』に所収されている作品の一つです。9編からなる童話集の原稿は残念ながら現存しませんが、「山男の四月」については初期形といわれる草稿が残っており、その構想の様子をみることができます。童話集掲載の発表形と比較しながら作品の魅力に迫ります。

自筆草稿の公開：

令和6年2月23日（金・祝）

～3月3日（日）（10日間）

編集後記

今年は宮沢賢治没後90年ということで、映画「銀河鉄道の父」の公開、宮沢賢治記念館でも特別展「銀河鉄道の夜」の開催など、改めて賢治さんの人生や作品の魅力に触れる機会となりました。今回の通信129号も、寄稿内容はお任せしていましたが、偶然にも雰囲気やまとまったことに驚いています。寄稿者の西尾さんとは、賢治ファンの移住者仲間です。なんとSL銀河には3回乗車したとか。鉄道ファンだけでなく、賢治ファンの心もがっちりつかんでいたようですね。花巻は星空も美しいですから、星座観察をしたり、サイダーを飲みながら、物語の世界に浸ったりしてみるのがいいかもしれません。（Y.S）